



書留

文久三年一至十二月

文久三年  
正月十一日

服部文庫  
イ 17  
2189  
11





親王傳方 准后傳慶之傳系入又一施茶院傳之寄送  
傳珠未至終之く一美之様有他 皇天儀 其元へ  
傳回勤は進美一乃傳之尾中 結之取目出度傳  
儀奉 在るて之く越わ了中 止度傳 存不之儀謹言

二月

了場子次をすの概

田中土佐  
横山主  
常報

京都をやアア

今傳いこも<sup>ま</sup>の京都やサ復後心まよる<sup>ま</sup>ハ 林宗義も其標  
こよいこせ<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>

二月十九日

貴國へ美を出

生を<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>系<sup>ま</sup>并<sup>ま</sup>皆<sup>ま</sup>津<sup>ま</sup>之<sup>ま</sup>節<sup>ま</sup>始<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>款<sup>ま</sup>者  
と不<sup>ま</sup>残<sup>ま</sup>英<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>三<sup>ま</sup>合<sup>ま</sup>上<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>首<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>創<sup>ま</sup>新<sup>ま</sup>球<sup>ま</sup>  
一<sup>ま</sup>夜<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>法<sup>ま</sup>物<sup>ま</sup>為<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>お<sup>ま</sup>如<sup>ま</sup>て  
十<sup>ま</sup>万<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>ボ<sup>ま</sup>ント<sup>ま</sup>ス<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>リ<sup>ま</sup>ン<sup>ま</sup>グ<sup>ま</sup> 我<sup>ま</sup>三<sup>ま</sup>十<sup>ま</sup>万<sup>ま</sup>  
兩<sup>ま</sup>三<sup>ま</sup>当<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup> 政<sup>ま</sup>府<sup>ま</sup>上<sup>ま</sup>有<sup>ま</sup>  
以<sup>ま</sup>名<sup>ま</sup>出<sup>ま</sup>み<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>其<sup>ま</sup>上<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>又<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>薩<sup>ま</sup>州<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>四<sup>ま</sup>日<sup>ま</sup>  
生<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>及<sup>ま</sup>横<sup>ま</sup>死<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>英<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>妻<sup>ま</sup>子<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>名<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>月<sup>ま</sup>料<sup>ま</sup>  
了<sup>ま</sup>了<sup>ま</sup>三<sup>ま</sup>万<sup>ま</sup>ド<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>ラ<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ん<sup>ま</sup>法<sup>ま</sup>語<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>了<sup>ま</sup>中<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>若

相拒りて即時及我年より政府  
重年申渡人々是れく少く他は  
存存り也

右より今十九日二十日廿四時 此三時今  
アトミラルと存

伸いひ也のり子以挨拶り度け別限相と  
り事方入船と止メボシバルテントと  
と焼拂下此係英國の旗章子對  
條約面一對一此後此期子及び中

# 秘

亥四月廿六日印書状

魚佛英和米葡<sup>寺</sup>國と先甲和親文の條約は五法法有る事

はは 朝廷何海と不取取中は其後集りて此事迄

和道外國和親文を拒絶し 詔を是述言すは人々其嚴罰は

万其方凡し長崎の船揚三港高航九二日まじり排入此後

國に此岩程速省とて一戦余は其言了事

右と通るは其第一中事也 和米以は 不事 其言は

和米以は 不事 其言は 不事 其言は 不事 其言は

是とて通程後たは了事

表為和事し因は之と事 和米以は 不事 其言は

在之と事と横濱港に近し 後若長長なる港に在る事

一 宗乃之格と云はれぬと云ふは下と云ふは

將軍職と稱せし也と云ふは上層の官に於て是の由陸奥守の由

一 但名守と云ふ所は其の法儀は法儀の儀と云ふは

勘合の文と云ふ者向後若くは後より由先づ因循の故也

一 將軍職と稱せしと云ふ將軍の由は在りて

不也と稱せしは其の由は在りて其の由は在りて

任は其の由也

一 屋名と云ふ者即ち其の由は在りて其の由は在りて

併し其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて

一 屋名と云ふ者即ち其の由は在りて其の由は在りて

不實の所は在りて其の由は在りて其の由は在りて  
氣成りて其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて  
志と云ふ者其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて

一 元来四月也と云ふは法名を云ふは其の由は在りて其の由は在りて  
其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて  
一 其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて  
由は在りて其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて  
其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて

一 横濱の境と云ふは其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて  
其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて其の由は在りて

一 屋下五月下りて夏時之如候に此非其由其存何と云ふ

一 横濱に身合入江大系早より降りかゝ浪人嚴方お振子に又如之京  
都下江戶より舟はけは太君ノ加勢ツルに好中あり

服部文庫  
117  
1291  
2331

大樹影をまきき香典を具へしはありしを。其後其後其後其後  
百々其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ



其の原前裁しと云ふ

大樹影をまきき香典を具へしはありしを。其後其後其後其後  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ  
其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ其の原前裁しと云ふ



下... 内... 九... 七... 精... 馬

七月廿九日

精中兵馬

群... 威... 六... 群... 威... 六... 群... 威... 六...

六月

六月廿五日

下... 上... 下... 上... 下... 上... 下... 上...

下... 上...

今... 何...







止

此身之思在依之山名洞下其古昔集内之弁和。集之能測也  
 暴編之徒引率推余者之及及於乱之反少之國也  
 任付控又於長屋之白議杜烈之及及於乱之反少之國也  
 雖斗不若止之場町内之國也及及於乱之反少之國也  
 引至之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 於威也及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 父子之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 一后之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 浪士船之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 挿之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 八月廿四日

井伴掃部以京來申出之書  
 和の内書

左十八日

禁表而所法向中務之備若委一源山中之飯。亦者一  
 中務之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 并月代務系長之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 人數少之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 市之田之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 井伴掃部以京來申出之書  
 三田權之書

八月廿五日

別紙控系之及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也  
 村系表中所學代の及及於乱之反少之國也及及於乱之反少之國也

うぢい  
八月

尚月を六日早し刻洛東之高皇寺より火の風もすくひ  
降る息燃より方丈一系に火を起大閣の屋の棟角焼  
定刻洛火致り安四条寺下祇園中旅所 法板あり  
いふを聞たり

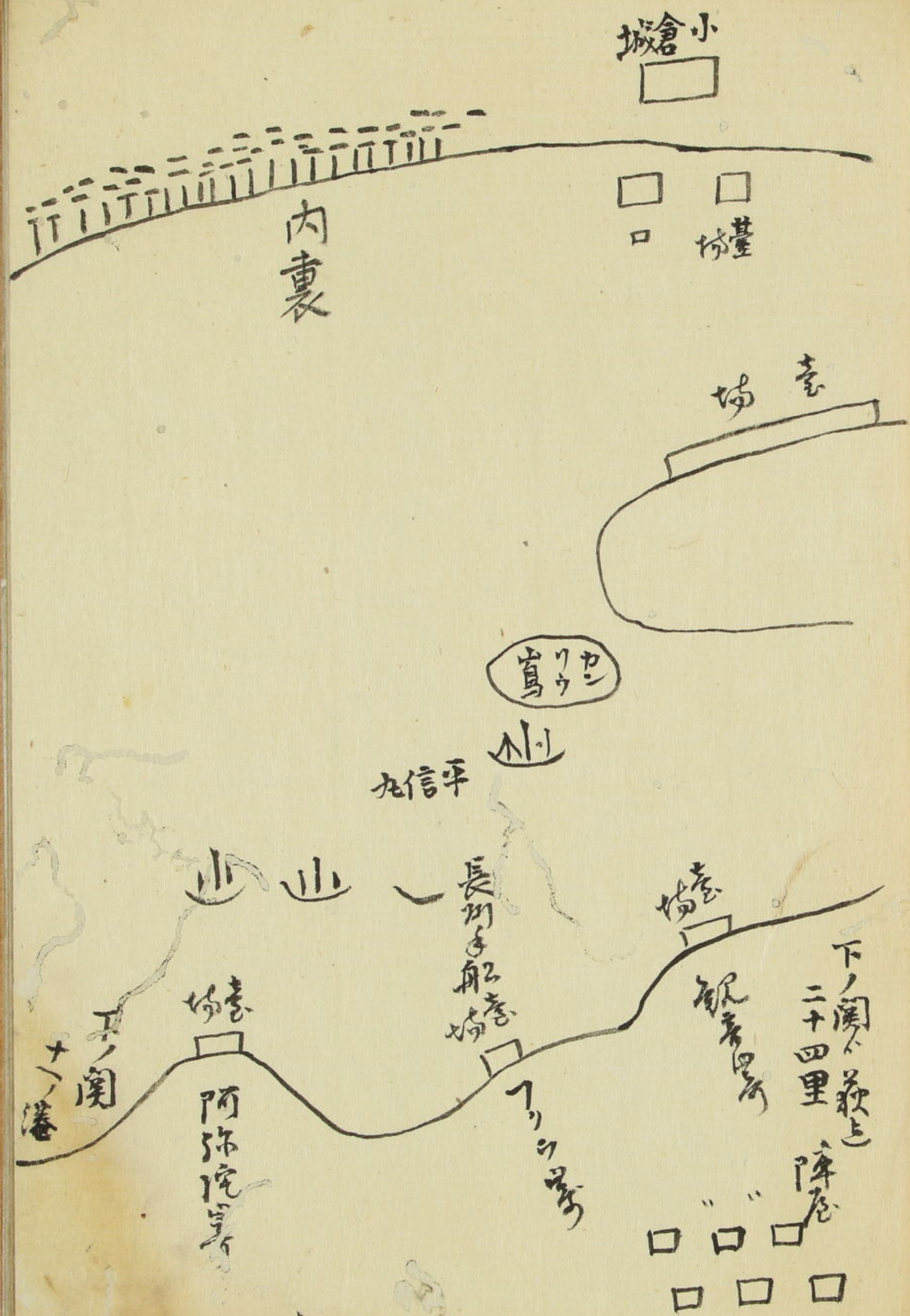
高皇寺より火の風もすくひ  
放神火焼折事 向後下河原より  
同記もあ

七月廿六日

右の通下河原より火の風もすくひ  
向後下河原より火の風もすくひ  
同記もあ

六月廿二日 飛脚 二巻 杉平伊豆より 十巻より

今地海岸杉平岡嶋を杉折場外不能 及多嶋の取一併  
外事拒絶し候へ 横濱表におきて未決判申す  
あつた交授 愛知より 兵部とつた  
部におつた  
右の通下河原より火の風もすくひ  
向後下河原より火の風もすくひ  
同記もあ



二月廿日

招年修葺手帳

連名

以上三回

七月廿日 小倉城下海ノ邊果公途ノ下ノ関上ノ京  
 内ノ形ノ事ニモテ其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 末々ノ形ノ事ニモテ其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 乃出帆ノ形ニ及マラズ其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 掃獵即ノ場下ノ形ノ事ニモテ其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 確証外ノ被取切帆ノ事ニモテ其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 高ノ段ノ様ニ申上ルル事也其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 申上ルル事也其ノ様ニ申上ルル事也其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 形ノ事ニモテ其ノ様ニ申上ルル事也其ノ様ニ申上ルル事也其ノ事ニモテ其ノ  
 七月廿日

七月

上秋家老

竹俣美作  
薩戸九郎

内言上



九月十二日

藤平度建白

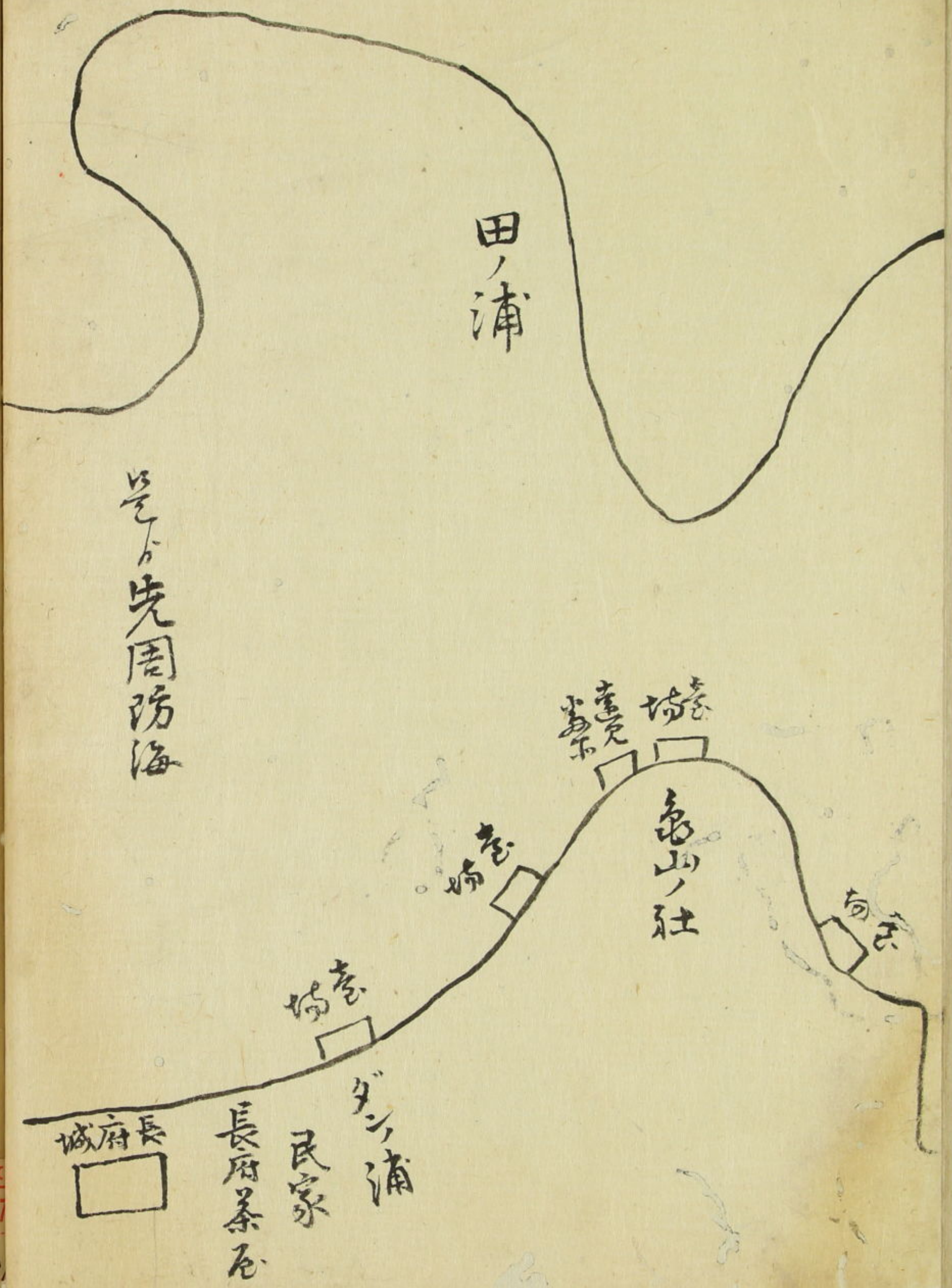
和忍於上系及乱暴奉勅命先年三召捕至谷津伊予作  
存込心等相調元来及込下政お違より昔言王權美  
三於下八物身命飽迄首存居可有在古一乱臣滅子一其  
殊之少殺擄夷一依吏三之似此度社者於國東上遠有  
有之る事及在古一皇國勇敵之士養食三及一趣言

松平相將手建白

以古事向古公古方會議中一守新正一敬言とる言

- 東方の海軍
- 海軍の建白
- 海軍の建白

服部文  
11  
128  
28





中無意と京とを隔る方藩より所者言に抄御ははる者  
以下に際し舟車と云ふ事と申すは御進之新以の御延平天  
下之列藩と申威光と申長連之御命と云々等と云ふ事  
上之川中と申鄭重と云ふ事と云ふ事と申す御中實切と云々等と云ふ事  
事は御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

三月

抄年お終り

福

名

信

三月十日

抄年お終り  
中後之旨と然る者との事とおぼしめし申す事と云ふ事

一 海平北次郎と改至生北一揆加り有し也

三月十日

平北二郎

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



八百廿七

園坊寺殿口後

- 一 雲梯又橋
- 一 西田<sup>口</sup>
- 一 平呂橋
- 一 九子橋
- 一 二子橋
- 一 三子田
- 一 山田

大目付  
目付

子

- 一 前田<sup>口</sup>
- 一 平田<sup>口</sup>
- 一 近前<sup>口</sup>
- 一 田原<sup>口</sup>
- 一 我田<sup>口</sup>
- 一 杉平<sup>口</sup>
- 一 平田<sup>口</sup>
- 一 久土<sup>口</sup>

一 登於楊

一 庶布有海

一 已谷於下

亥九月日益平... 何... 日... 高... 川... 馬

服部文 11 12 24

中

新山... 高天田...

夫

山... 平... 山... 主... 族... 竹...

中

久世... 田... 隼... 人... 上...

松... 平... 出... 雲... 雲...

復... 空... 師... 之... 師...

田... 廣... 物... 之... 師...

田... 廣... 物... 之... 師...

道領首... 再拜謹呈書 嵩川君閣下 通聞 一日暴師

救世之弊也 今益賊據和之南山 恃其險而以穿窬計之

智逞草如之勇師奉 勅與諸侯之師攻之 已經二旬

凱歌未奏 奈其弊何 聞賊雖驅使民丁 其烈士不過

一百餘人 以我一師 勒之未足 以為武况 以救諸侯之師

不能速討 天下謂之何 且天下之亡命 無賴者 聞其如是 則

安知不起 焚中 赤眉於地下 哉 道竊以謂 且速討也 夫據

險者 馬服君 所謂一與一奪之制也 非死士不可任 而死士

不可多得也 然死士固不用多 而足矣 源賴光討江嶽

賊之事斯可見矣何患其不多乎道撫撤隊三年於八  
十人中可得死士三十人而皆可以使蹈湯火入虎穴者伏願  
使道與三十人俱注必不出旬月斬賊魁首以復雖不能  
斬魁首必擊走之不能復保險此二者不克則道等三  
十人以一死報國家耳不知其他也蓋聞說者言曰薄犯  
險必傷衆不如遠圍絕糧道也道竊以謂遠圍絕糧糧  
而彼知其不免是窮寇也出戰殺有之日我師能保萬  
全乎諺云窮氣反噬猶赫我藤堂氏而萬一系賊  
之名天下笑何且國家之弊極而天朝幕府幕之責亦  
可辭其可不速討哉時已季秋堅冰大雪之至非遠也  
冰雪雖害乎賊而亦不利乎我我討賊實在旬月之間

若夫大駕隨衝刺破崎大夫有焉而撤隊五十人屬焉庶  
幾可以備緩急也直敢布腹心詞下實國之道願首  
再拜

但與一朱丁略

全平剛  
下亂不難

尚月十日此生即

精三少少以用田村

延元其十人

在亦十高七人

卯廷下教到

又于下小使

止意教所

付如意

少控所

一在亦

區

入りの山

地味人、いふ所  
いふ事とある  
こと、能くしる

大物末、家内、いふ石城、而  
般川、いふ、十二日、夜、色、を

別列、出、石、針、接、いふ、いふ、いふ、  
余、年、いふ、性、者、三、人、百、棟

月、不、作、田、いふ、氏、いふ、遊、徒、い  
行、せ、ら、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

○出石(飛騨井一住十三百)  
 二破(先づ九寺教書)  
 ○生即控(命命)  
 出石(十屋丸)  
 播磨(松平多助)  
 娘(道境)  
 ○出石(上段一住)  
 市(三石門)

二

出石(十三日) 生即表  
 播磨(松平多助) 娘  
 ○出石(上段一住)  
 市(三石門)  
 出石(十屋丸) 播磨(松平多助)  
 娘(道境)  
 ○出石(上段一住)  
 市(三石門)

丹念丁之市口と島在

色  
口と云

去八月廿一日所中夏高  
後月三日西野始決七日  
去外流下向三長原修事  
女子及不流と云云

船運す款額を成る所  
此取力為代上京の北南  
板着すに事と云云  
不運す故の事と云云  
正徹座りて事也  
船運す計り深心願

一先堂の事  
取在す  
舟の事  
生即  
去随  
十  
中入

十月十日  
伏見川  
山中

九

右の如く在りし中興の事  
以て之を記す

十月 仙居の事あり  
平尾吉高

○前月の如く但子坂の湯場

海へ入りし事あり 阿田年人  
三平の事あり

阿田年人との事あり  
二阿田年人との事あり

○出石藩の事あり  
三条西原の事あり  
十八日午後八時あり



此交生神村代官の上伊予節孫伊豫守と浪士入道は  
九日夜三カノ浦松之志共節人教山指六人之内松  
三人と云ぬ松之志共節人教山指六人之内松  
分まじりぬ松之志共節人教山指六人之内松  
同ノ前書代官入道也

一 古徳寺節孫伊豫守の事あり  
一 其節孫伊豫守の事あり

元禄新家中の事あり  
寺ノ事あり  
元禄新家中の事あり  
元禄新家中の事あり



山石挿ニ其極也

一 前代武官浦中・最モ支那新ニ行キテ其見ニ其然ル如ク

中世ヨリヨクヤ一見ニ其見ニ其然ル如ク

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 生れ共流士共大将高知等少路ニ一男共初代ニ事

一 此の神は、古くより、  
山ノ神と云ふ事あり

一 此の神は、生れながら、  
百の音階に、  
此の神人、  
此の神人、

一 此の神は、  
此の神は、  
此の神は、  
此の神は、

一 此の神は、  
此の神は、  
此の神は、  
此の神は、

一 此の神は、  
此の神は、  
此の神は、  
此の神は、

一 此の神は、  
此の神は、  
此の神は、  
此の神は、

一 此の神は、  
此の神は、  
此の神は、  
此の神は、

一 此の神は、  
此の神は、  
此の神は、  
此の神は、

一 此の神は、  
此の神は、  
此の神は、  
此の神は、







